

徳有鄰

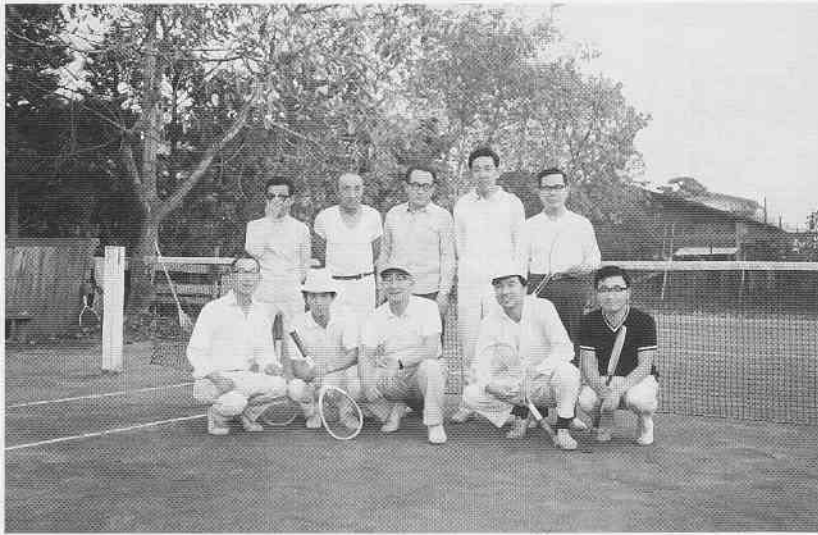
「徳不孤、必有鄰。」

訳
豊かな人間性のある人は、決して孤立することなく、必ず理解する人、共鳴する人が集まってくるものである。

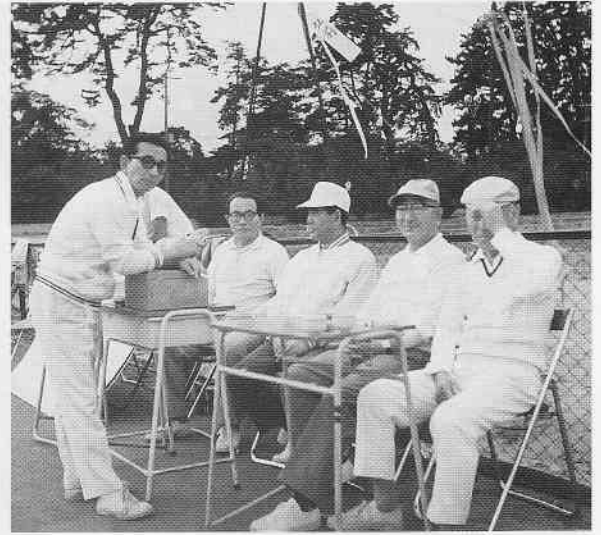
論題、里仁より

書 中西 漢州（政人）

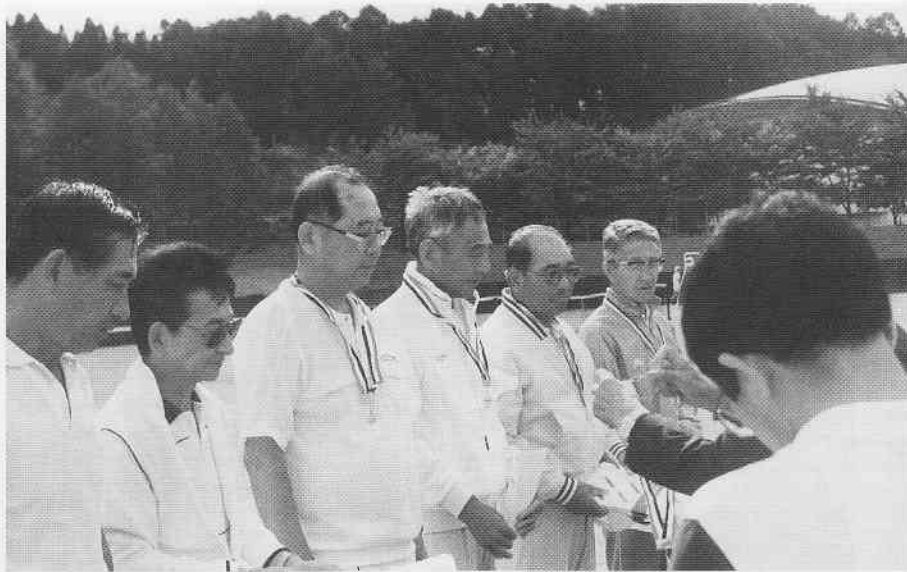
表 紙



往年の名選手達～銀行コート クラブ発足当時



今は、懐かしい名選手



優勝、表彰状



県下百歳テニス大会 S56.9.15



大鰐コートにて 前列3人が一番の若手 いまは？



若き日の迷選手 柴田高校コート



そう言えば、こんな若い時もあったんだ～



第5回 全国健康福祉振興やまなし大会
ねんりんピック'92 やまなし 平成4年10月31日から 於：山梨県

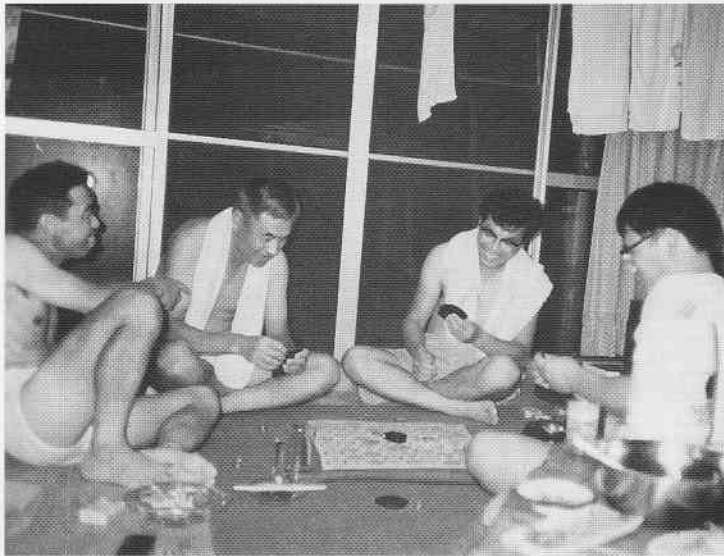


優勝カップを持ってハイポーズ



ママクラブの綺麗どころといっしょに

山荘



はだかのバクチ打ち



山荘の前の川でジャコ取り 蛇から逃れて川の中へ



山荘の近くの浅瀬石ダムコート



毎年のハゼ釣りも楽し 今は亡き今勉さん



H 4 . 5 . 31



S 59 . 6 . 24



ライバル同志の第2ラウンド さて軍配は？



又来年も。サヨウナラ あ!! 理事長乗ってません



札幌まで武者修行



小樽ガラス工芸館



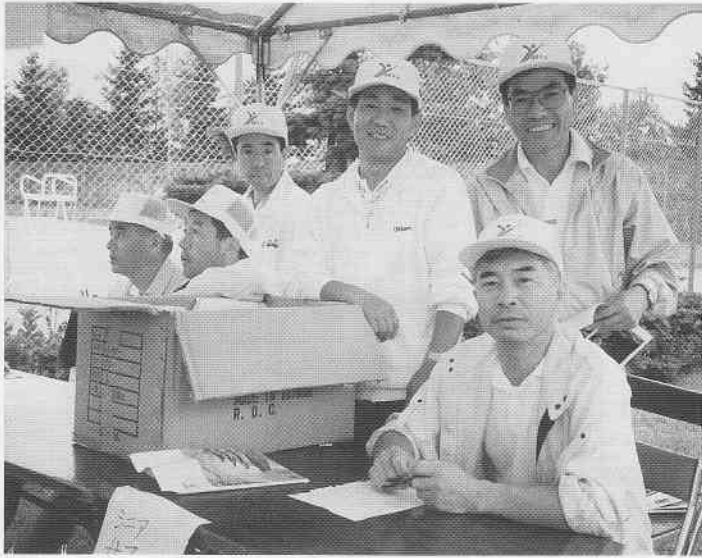
札幌遠征後、小樽運河へ



札幌から他流試合へ この時、残念ながら桜の開花が遅かった



我がクラブお薦めの店「ルージュ」



全日本社会人大会を運営



全日本社会人大会へ神奈川県から出場
残念ながら雨の為1試合もせず帰郷



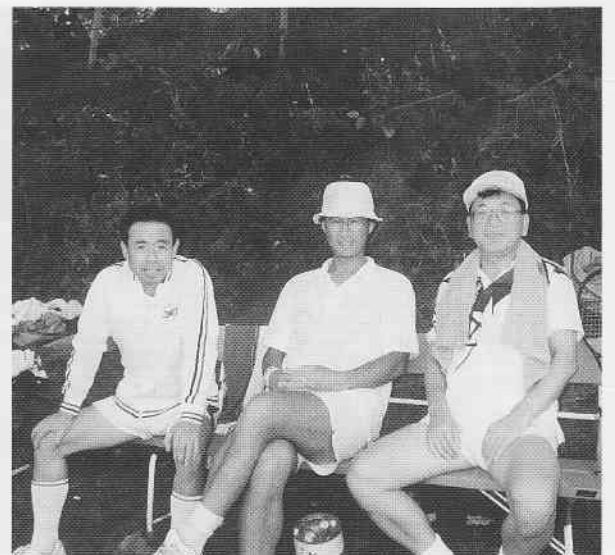
100才会 お花見テニス



今は亡き、今勉さんの最後の雄姿



県下でもトップクラスの若手と年寄



クラブの名物男

『 切磋琢磨 』

弘前鷹揚テニスクラブ

会長 野村 一夫

賑やかな弘前ねぶた囃子に発散している夏祭りの最中。弘前鷹揚テニスクラブ創立30周年記念を迎えるに当たり「光陰矢の如し」の諺のように今あらためて月日の経つのが早いことを痛感しております。本日は当クラブ会員の他に大館鶏鳴クラブ、弘前ママクラブの皆様が多数ご臨席下され、誠に有難く厚く御礼申し上げます。

振り返ってみますと、私達は徒町川端町にありました弘銀テニス愛好者数名により始められ、弘前公園の鷹揚園の名を借り「弘前鷹揚テニスクラブ」の名称として発足いたしました。コートが東西に面していて、夕陽の直射を受け大変苦勞したものです。練習後、良い汗をかかせてもらった後、隣の『平野さん』から冷たいビールの一杯のおいしさは今も忘れることが出来ません。その後会員の増強を図り、各種大会への参加。クラブ主催の「初心者対象のモーニングテニス教室」「弘前市長杯争奪ファミリー大会」「津軽地区シルバー大会」等は現在も続いております。

特筆すべきは友兄鶏鳴クラブとの春・秋、年2回の交歓親睦試合です。30年も続いていると云うことは驚嘆すべきことであり、“何と云いましょうか、大館さんとは《ウマ》が合うと云うことでしょうか。”と云う一言に尽きるのではないのでしょうか。しかしその間、初代会長山内次郎さん、弘庭協会長田村文雄さん、篠崎正富さん、副会長高瀬栄吉さん、顧問福岡彦衛さん、芥藤政太郎さんが相次いで他界されるなど悲しみに見舞われましたが、きっと幽界で30周年記念を喜んで見守ってくれていることと思います。

過日本県はスポーツ立県宣言をされました。当クラブも、その一翼を担うべく、これからも切磋琢磨し会員一同一層の精進を重ねる所存ですので、これからもご指導、ご鞭撻、ご交誼を賜りますようお願い申し上げます。

末筆となりましたが、創立30周年記念誌他多方面にわたりご協力いただいたクラブ役員・会員各位に対し心からお礼申し上げますご挨拶といたします。有り難うございました。

『 遠からず、近からず 』

大館鶏鳴テニスクラブ

会長 高橋 禎三

弘前鷹揚クラブ創立30周年、誠におめでとうございます。思い出を手探れば、昭和58年運動公園にて、交歓試合後、大町の第一ホテルに於いて創立15周年のイベントが華やかに開催され、ステージに繰り広げられるねぶた囃子や、笛吹き名人の芸に我々招待客はしばし酔いしれていました。あれが15年も前のことかと、時の流れを感慨深く思い出しています。弘前さんと大館との交流は昭和42年から始まっており、詳しいことは省きますがこの頃秋田（暁鐘クラブ）弘前（鷹揚クラブ）大館（鶏鳴クラブ）の3市がオープンで定期戦を開催しておりました。丁度弘前が当番のとき、時の鶏鳴クラブ会長神林正樹氏（故人）、理事長越前友吉氏（故人）から「朝テニスは健康に良いから弘前もやったらどうか」と奨められたことから、弘前の朝テニスが始まったと聞いております。またこのときから弘前鷹揚クラブと名称も改まり、大館との接近交流の契機ともなりました。弘前中央高校のコートが当時の主会場でも私も40代で若かったので、試

合では良い汗をかかせてもらいました。それよりもまして、コート傍らに、寿司コーナーやそばコーナーなど、飲み食い放題の屋台が置かれるなどその贅沢な歓迎ぶりにはただ恐縮するばかりでした。大館当番ではそれをどうやってお返ししたらと心配が先を走ったことが思い出されず。

我が鶏鳴クラブも歴史が古く、過去に秋田、八戸、盛岡、石巻等限りなく交流試合を行ってきましたが、今日まで揺るぎなく、30年間も続いているのは弘前鷹揚クラブだけです。弘前さんとは力の差が歴然としており、このことは人口格差からみても18万の都市弘前と7万の大館から推測しても長続きの要素はないはずなのに、何故か弘前さんは大館を可愛がってくださっています。この不思議さを私は自己流に下記のように分析し、酒客の自慢話にしております。

- ① 鷹揚クラブが朝テニスを始めたことによって共通の話題も増え、クラブの性格が近似してきたこと。
- ② 実力が接近し、白熱のプレーが多い中にも、フェアプレーとユーモアを忘れずに、正調津軽弁と正調秋田弁の歓声とジョークが常にコートを支配している。(懇親会もその延長線にあること然り)
- ③ 弘前市、大館市遠からず近からず、遠征距離が適当であること。

光陰矢の如しと申しますが、正にその如くあれから30数年が立ち流れの早さに驚きを覚えます。そして古きは消え、世代は確実に交代しておりますが、右の要因を次世代が忘れない限り交流は続くものと信じております。この度の記念行事では、何処でどんなプログラムを披露下されることやらと楽しみです。30周年記念ですから15周年記念の倍の豪華さを企んでいるとすれば3年後に控える我が鶏鳴クラブ50周年のイベントに影響するところ大でありますから派手に過ぎませんようにと秘かに願っているところです。鷹揚クラブ益々の発展と、会員皆様のご活躍を祈念しお祝いの言葉に替えさせていただきます。

『 兄妹クラブとして 』

弘前ママテニスクラブ

会長 吉沢 慶子

この度は30周年を迎えられ、誠におめでとうございます。貴クラブが出来て5年後に、私も弘前ママテニスクラブも誕生いたしました。発足当時は基本練習から色々ご指導いただき、ありがとうございました。感謝しております。貴クラブとは、ご夫婦でテニスをなさっている方が多い関係もあり、親しくお付き合いさせていただいております。春はお花見テニス、秋は納球会、その他恒例の大館鶏鳴クラブとの交流試合等、その後の懇親会も楽しみの一つになりました。又、平成8年には札幌北区同好会、屯田クラブとの親善試合にも参加させていただき、思い出深い旅が出来ました。

ところで、貴クラブには長年モーニングテニス講習会を続けてこられた実績があります。その事は、最近減少しつつあるソフトテニス愛好者増大に、おおいに貢献なさっていることでしょう。試合への参加も必要でしょうが、大切な根っこの部分を支えてこられたと思います。各々お仕事を持ちながら、ご苦勞も多いでしょう。会員相互の信頼とチームワークが良くなければ出来るものではありません。クラブの皆様のご努力に敬意を表します。これからも兄妹クラブとして、ご交誼、ご指導をいただきたく存じます。終りに、貴クラブの益々の発展と永続を心からお祈りして、お祝いの言葉といたします。

鷹揚クラブ沿革（30年の歩み）

昭和44年6月8日

弘銀テニスコートの隣、割烹『平野』において弘前では初めてのテニス愛好者のグループとして「鷹揚クラブ」を結成。参加会員18名、年会費1000円で発足。クラブ結成のきっかけは、徒町川端町にあった弘銀のテニスコート（39年造成）に集まったテニス愛好者（銀行員以外の選手は当初数名にすぎなかった）たちは43年より大館鶏鳴クラブと秋田暁鐘クラブとの交歓試合に弘前から参加することになったことから、両クラブにならない弘前の象徴である鷹揚公園にあやかり「鷹揚クラブ」と命名し、以後積極的に会員の増強を図った。当初の役員は次の通りである。

会 長 ・ ・ ・ ・ 山内 次郎
副会長 ・ ・ ・ ・ 里見 真平
幹事長 ・ ・ ・ ・ 高瀬 栄吉
幹 事 ・ ・ ・ ・ 八島 忠太郎、野村 一夫、大友 正
顧 問 ・ ・ ・ ・ 福岡 彦衛、斉藤 政太郎

9月、大館桂高校コートにおいて大館、秋田、弘前の3クラブ交歓試合を行う。

昭和45年度

9月27日、3クラブ交歓試合を秋田八橋市営コートで開催。

昭和46年度

9月24日、3クラブ交歓試合を弘前中央高校コートで開催。弘銀クラブ庭園で懇親会をし、唐牛社長が挨拶した。

昭和47年度

9月24日、会場各地持まわりの第17回関東・東北庭球百才会大会が大館桂高校コートで開催。松組（70才以上）、竹組（60～69才）、梅組（50～59才）の3段階。鷹揚クラブより、竹組に黒羽・山内組、田村・鈴木組、梅組に高瀬・篠塚組が出場。

10月15日、弘前中央コートにおいて大館鶏鳴クラブと交歓試合を行う。秋田は往復に時間がかかるので本年より中止することとし、大館鶏鳴クラブとは春弘前、秋大館と年2回年中行事として交歓試合を継続することとなった。

昭和48年度

3月、弘前軟庭協会を強化するために鷹揚より田村文雄氏を協会長に送り、バックアップすることとした。

昭和49年度

9月15日（敬老の日）、県軟庭協会連盟主催、青森コロシウム松森コートにおける県下軟庭百才会大会に黒羽・山内組、田村・鈴木組、川越・桜庭組、八島・高瀬組の4ペアが出場した。

昭和53年度

鷹揚クラブ主催で初心者対象のモーニング・ソフトテニス教室を開催。5時30分～7時の1時間半、7月～9月にわたって週2回、中央高校を借用して以後毎年実施する。

8月20日、弘前市民総体開会式において、スポーツ振興の功労者として弘前市長・鳴海体育協会会長より山内会長に感謝状が授与された。

昭和54年度

10月7日、田村協会長は東京へ転居のため協会長を辞任、竹内黎一代議士が次期協会長を受諾し、ウェディングプラザで歓送迎会。12月8日、県軟庭連盟を通じて、日本軟式庭球連盟より地方軟庭の振興に寄与した功績を認められ、鷹揚クラブが全国表彰の楯を授与した。同日、県軟庭連盟より山内会長が県功労賞を授与した。

昭和55年度

6月20日、鷹揚クラブの積極的な協力により、ハワイ男女高校選抜選手団を招待。中弘南黒地区の男女高校選抜選手と親善試合を開催。6時半より、ニューキャッスルホテルで福士市長、鳴海体育協会長、竹内軟庭協会長他関係者多数出席し、開放的なレセプションを開催した。

8月12日、第1回市民ファミリー親睦大会を鷹揚クラブが主催し、開催する。

昭和58年度

5月1日、弘前軟庭協会50周年記念式典が午後6時30分より駅前第一ホテルで開催され、鷹揚より16名参加した。

昭和59年度

4月、15周年実行委員会設立、委員長は高瀬氏、副委員長は今勉氏となり、15周年記念史の編纂を始めた。

5月、ファミリー大会で使用の〔市長杯〕（A級）と〔教育長杯〕（B級）を申請し、6月に〔市長杯〕を受領した。

6月24日、結成15周年記念祝賀会が午後4時30分から駅前第一ホテルで開催されました。この日は恒例の大館鶏鳴クラブとの交歓試合の日であり、鷹揚クラブ員60名と鶏鳴クラブ員42名が参加し行われた。

昭和60年度

4月、ファミリー大会で使用の〔議会議長杯〕（C級）を申請した。

6月7日、高瀬米吉副会長が死去。

9月4日、山内次郎会長（軟庭協会副会長）が死去。

9月29日、佐藤 哲丸氏、加藤 鉄正氏の送別会を『炉辺』で開催。有志23名参加

12月22日、第1回北日本軟式庭球大会（克雪大会）開催。

平成 3年度

6月30日（日）大館鶏鳴クラブ対抗戦の3次会を『ふぐ新』で開催。『ふぐ新』は道路拡張工事のため移転することになっていて、本日が最後の営業となった。

平成 4年度

大館鶏鳴クラブ創立40周年は5月31日の大館交歓試合の終了後、ロイヤルホテル大館において祝賀会が盛大に開催された。

当クラブ理事、松山 継道氏の日本伝統工芸展入賞を祝い、クラブ員24名が参加して、

1月25日に『ふぐ新』に於いて祝賀会を開催した。

平成 5年度

鷹揚クラブの年会費6000円が今年度から7000円に値上げになった。また、各大会（カワサキ杯、市民大会、ヨネックス杯、克雪大会、インドア大会、船水杯）の参加料はクラブで負担することになった。

9月4日（土）～9月5日（日）全日本社会人選手権大会が弘前運動公園コート、岩木山総合公園コートで開催されたが、初日は雨のため中止になり、2日目はコート整備に苦労したが、クラブからも今勉・秋元組、倉光・中村組、相沢・相馬組、今隆・築館組が参加し善戦した。

平成 7年度

5月7日（日）18：30～ 弘前ソフトテニス協会総会に、秋元理事長・相馬氏・今隆氏が参加。当会で鷹揚クラブ会長、八嶋忠太郎氏が功労者として表彰されることに決定し、来年度の県の総会で表彰されることになった。

平成 8年度

4月29日、札幌北区同好会員24名が弘前公園の桜を見ながら、鷹揚クラブを訪れ、交歓試合を行なった。結果は18勝18敗であった。（札幌北区の藤田会長が弘前出身で弘前工業卒業であった。）

9月7日～9日、春の交歓試合のお礼を兼ねて、鷹揚クラブ、ママクラブの有志17名が札幌へ遠征。8日は北区同好会と屯田クラブと交歓試合を行なった。9日は市内及び小樽市内の観光。

2月10日、当クラブ員 今 勉氏が死去。上記の遠征が最後の旅行となった。

3月8～9日、十和田湖溪流グランドホテルにてテニスをしながらの親睦旅行。鷹揚クラブ、ママクラブ等から17名参加。

平成11年度

5月の総会に於いて、長年鷹揚クラブの会長として当クラブのためご尽力頂いた八島会長が勇退され、会長として野村一夫氏が就任した。

8月1日、弘前鷹揚クラブ30周年記念祝賀会が大館交歓試合の終了後、境関温泉において盛大に開催された。記念事業として30周年記念誌（200部）の発行とネプタのTシャツに鷹揚の文字を入れて、100枚プリントされた。

『 殿下とのこと 』

弘前鷹揚テニスクラブ

理事長 秋元 俊一（昭和54年入会）

鷹揚クラブのメインイベントは大館鶏鳴クラブとの春・秋の対抗戦である。いつの頃からは定かではないが、この大館戦には必ず米谷 実氏とペアを組むことが公然の約束事になっていた。そして、これもいつの頃からは定かではないが鶏鳴の「殿下」と我々が呼ぶ海老名氏との対戦を特別な楽しみとするようになっていた。顔だちが当時の皇太子殿下に瓜二つということで米谷氏が命名したものである。（余談になるが彼はあだ名付けの名人である。他に「タタミ」「メカケのつれ子」等々、本当にピッタリで思わず膝をたたいてしまう。）他の誰に負けてもよいが殿下だけには負けられないと敵愾心を燃やして対戦するようになっていた。憎い訳ではない、嫌いな訳でもない、いじめたい訳でもない。深いところで愛を感じていたのかも（?）。敵も我々の雰囲気やそれを察知して、外見は穏やかさを装って、内実は歯を剥いて戦いを挑んできた。歯の立たない状態が数年は続いたろうか。楽勝だよって態度で軽くあしらわれていたものであった。我々はその態度を肥しに日夜、特に夜10時過ぎころから猛特訓をかさね、腕を磨き、肝臓を鍛え、来るべき対抗戦を目指したものであった。

それらの努力が少しずつ、成果を上げ、そのうちに互角か、それ以上の戦績を上げるまでとなった。それまで10年は要したであろうか。最近ほとんど負ける気がしないのである。殿下の歯軋りが聞こえてくるようで、ゲーム終了後の懇親会でのビールの味はここ数年格別のものがある。ところが最近、昭和から平成に代替わりして殿下から陛下に格上げになったせいか、はたまた負け続けに己の実力に見切りをつけたのか、亡国のスポーツ「ゴルフ」に逃避しているとの噂が聞こえてきた。この噂が本当だとすると誠に悲しく、淋しく、やりきれない思いでいっぱいである。願わくはブルジョアジーのスポーツ、環境破壊のスポーツから早々に足を洗い、健全なるテニス界に復帰を願ってやまない。さらに願わくは対抗戦に参加して負けつづけていただきたいものである。以上お願いして30周年をむかえたいと思っている。

鶏鳴クラブ 万才!!。 鷹揚クラブ 万才!!。

『 子供を自転車に乗せコートへ 』

相沢 正敏（昭和49年入会）

鷹揚クラブ創立30周年おめでとうございます。

私がクラブに入ったのは、故武沼先生（本町武沼外科院長）の紹介でした。風邪で会社のすぐ近くにあった病院へ行って診察してもらった時、先生に何かスポーツしている？、と聞かれたのがきっかけでした。昭和49年頃だったと思います。当時若い人といったら自分一人であり、あとは大先輩ばかりでしたが皆様に大変かわいがられました。その後、相馬孝平さん、三上純一さん（岩木クラブ）が入ってこられ、3人でよく練習したものでした。当時は東北電力のコートに練習にも行ったりした記憶も今はなつかしいです。当時、仕事が輪番制であり自宅にいる時間が長く、よく子供（3才～5才）を自転車に乗せ、テニスコートで遊ばせたりしたものです。

早いものであれから25年過ぎようとしております。当クラブは弘前市内では、いつでも誰でもコートでテニスを楽しむことができる唯一のクラブだと思います。今後も理事の皆様は大変でしようけれどクラブを宜しくお願いします。

『仲間との出会い』と『別れ』

相馬 孝平 (昭和50年入会)

昭和50年夏、まったく生活したことのない街にきて友人もなく寂しい思いをしていた時に、ふと、市の広報に朝テニスの講習会があるのを知り、恐る恐る講習を受けに行ったのがキッカケで、この弘前鷹揚クラブに入会することになりました。当時、私と同じ歳の相沢氏が一番の若手で一緒に練習したりベアーを組んで大会に出場したりして、この地で初めての友人との出会いです。その後も朝テニスは続き現在に至っていますがその間、多くの仲間が入会しました。職場、年代も違っても休みの日には大勢の仲間が集まり、公園のコートでプレーし、夜の飲み会が最大の楽しみになっています。気の合った仲間で『ハゼ』釣りを楽しみ、小旅行に行ったり、山荘に集まって夜の更けるのを忘れて飲み明かしたりと本当にいい仲間なのだが、最高に残念なのは今は亡き「今 勉 氏」のこと、人情に厚く、曲がった事が大嫌いな熱血教師だった。彼は、3年前「癌」に侵され、呆気なくこの夜を去ったしまい誠に痛恨の極みである。今でも事あるごとに思い出される。これからも体力の続く限りプレーをし、飲み会を楽しみたいものである。皆さん今後ともどうぞ よ・ろ・し・く

『ばくろ』

三浦 進 (昭和53年入会)

弘前市には「鍛冶町」と呼ばれる盛り場がある。我が鷹揚クラブではそちらの方面が嫌いなお方は皆無であるからして、アフターテニスでは有志を募って闊歩することがしばしばである。我がクラブの理事をしておられるK氏やY氏はコートでの球捌きには定評があるが、ナイターテニスの方のタマ捌きのテクニックもつとに有名である。(尤も口三味線による自己アピールも並の者では真似の出来る代物ではないと思うけど・・・)

大館の鶏鳴クラブさんとは毎年、春・秋2回の交歓試合を通じて長くて深い親交の歴史がある訳ですが、ある年の試合後の懇親会を終えて、弘前へ到着した後、懇親会の余韻を引き延ばそうと鍛冶町の某センターのRというスナックへ集合した。ここのママさんというのが絶世の美女で飲食代も安いとくれば当クラブの理事長としておられるA氏がしばしば訪れるというウワサもむべなるかなという気がする。そのママさんからダンスしょうと声がかかった時一瞬戸惑った。テニス一筋の超真面目人間のワダクスはもちろんダンスなんて踊れない。断ろうと思ったけど千載一遇のチャンスでもある。まわりに勧められてしぶしぶ立ち上がった。(あくまでもポーズで内心はそうでもなかったのだが・・・)「チークダンスしか出来ないよ」と言いながら手を握った・・・これは良かったのだが、次の瞬間あっと思った。目の前が真っ暗になったのである。何とワダクスの顔は彼女の巨大なバストの中に埋没していたのである。彼女から見れば薄く禿げ始めた頭頂部が、モロに見えたに違いない。この様な姿勢ではワダクスの最も大事な部分は彼女のひざ上25センチのあたりでピクピクしていたという事は想像に難くないでしょう。彼女のB92から窒息死を免れたワダクスは生き延びるという喜びをかみしめる為に、A理事長から誘いがあるといそいそと出掛けてしまう今日このごろである。

テニスを始める前はイロんなスポーツに手を出していた。その中で一番おいしくビールを飲むスポーツは何かと考えているうちに、軟式テニスを発見したのである。硬式もあるが音が違う。ピシャとボールの横ツラをビンタ打ちする度毎に、住職をしておられるK氏の法力におすがりせずとも百八つつある煩惱の一部が一つずつ解消していく様な気がする。

ワダクスの頭頂部のあたりがまだ黒々として、ふさふさしていた頃の話であるが、コート上で散々に絞り尽くされ脱水症状であったので、ショートパンツのまま鍛冶町のスナックNへ飛び込み生ビールを注文した。一杯500円のジョッキの中身は数秒も立たないうちに何処へともなく消え去ってしまったのである。余りの早さに店の姉サが呆れて「何ボ早エは、初めから二へ頼めば良かったんでバす」、「……………」、「所であんた何やって来たの?」、「テニス」、「えっ、ペニス?、シケベこの……。ワダスさも教えて……………」、「ペニスじゃないの。テニスだってば……………」。今日もコート上での球捌きよりもアフターテニスをモットーとしているワダクスがここに居る。(脱稿)

『 テニスって何? 』

今 隆 禎 (平成3年入会)

中学・高校・大学とスポーツに全く縁がなかった私(興味はあったのだが)が初めて軟式庭球を見たのは、大学を卒業し定時制に勤めていた昭和51年の頃であった。自転車で公園を散歩していた時、高校生らしき女子選手が上下真っ白のウェアに、手にはラケット「これがテニスというものなのか」としばらく見ていたようだ。54年、黒石商業高校に転勤、若かった私は何かの顧問をしなければならず、引率顧問でいいからということで、テニス部の顧問となった。当時テニス部の顧問は西谷俊一氏で“こわい顧問”として選手に恐れられ、チームとしては優勝を狙うほどの成績を残していた。テニスに関し、何の知識も、技術もない私はただ練習をみているだけの退屈がイヤで“私もテニスで遊んでみよう”と思いはじめ、生徒と一緒にボールを打つようになった。以前から腕力には自信を持っていたのでボールを打つことは簡単だったが、どうしても生徒のようにうまくいかない。生徒が打ったボールはネットを越えてからストーン、ストーンとドライブがかかるのに、私のボールはいつもまっすぐフェンスオーバーし、校舎ダイレクト。そんな私も5年後くらいには、練習後、暗いコートに照明をつけ、女子選手を捕まえては練習試合をするのが一日の楽しみでした。その頃からはテニスに明けくれ、家に帰るのは毎日8時頃、土日は練習、合宿や試合の遠征やらでほとんど家にいることがなく、女房にはいつも小言を言われながらもテニスを続けていました。

その後、現在の職場に転勤してみると、軟式庭球でなく硬式庭球だけ、ソフトテニスをやりたい私は同僚から誘われて東クラブの練習に参加したりしましたが満足できずにいました。そんなある日、なにげなく見た弘前市の広報にモーニングテニスのことが載っていました。モーニンググテニスへの参加を機会に鷹揚クラブに入会することができました。(台風19号の年、平成3年のことです)最初はテニスをするだけの筈が、当時理事長であった相馬孝平氏に誘われ、テニス後の夜の反省会という「悪の道」へとおちぶれていったのです。しかし、「テニスに出会えた」だから「鷹揚クラブに入れた」だから「いい仲間ができた」だから「充実している」というのが本心でしょう。鷹揚クラブの先輩・仲間に感謝し、鷹揚クラブのなおい層の発展をお祈りいたします。

弘前鷹揚クラブよ永遠なれ!!

『 ソフトテニスを楽しむ 』

千葉 嘉美 (平成5年入会)

私は、ほぼ毎週ソフトテニスを楽しんでいます。職業も年齢も違いますが気のいい仲間が集まる「鷹揚クラブ」の会員になれたからです。

これまでは、高校の軟式庭球部で30年間、顧問・コーチを続け、生徒を育てる毎日で、自身自身がソフトテニスを楽しむ余裕などほとんどありませんでした。その反面、東北大会・全国大会へ出場させた喜びを味わう事ができたりして、良かったと思っています。中学・高校と庭球部の経験のない私は、テニスの指導を受けたこともなく、すべて自己流でしたが、私なりにゲームを楽しんでいます。これまでで一番楽しかったゲームは、大学1年生で出場した「東北インターカレッジ大会」でした。入学して間もなく友人達とテニスらしきことをして遊んでいたら、選手不足で出場できずに困っているのが旅行のつもりで参加してくれないかと頼まれたのです。ラケットを握り1カ月半位のレシーブもできない状態の出場でした。しかし、なぜかスマッシュだけは自信がありました。東北でトップクラスの選手を相手に、室内での試合という事もありましたが、6セットまでは対等にゲームをしたのです。敗れるのは当然ですが、初心者中の初心者が一流選手に必死なゲームをさせたという喜びや楽しさは今でも鮮明に思い出されます。

最近、年2回行われる大館鶏鳴クラブとの対抗試合をどの試合より楽しみにしています。全力で戦うゲームはもちろん楽しいのですが、ゲーム後の交流会も楽しみにしています。これも、「鷹揚クラブ」という気のいい仲間がいるからこそ楽しめると感謝しています。このような仲間とできるだけ長く、テニスを楽しみたいと願うこの頃です。

『 弘前で見つけた楽しいテニス 』

花田 磐 (平成4年入会)

平成2年12月24日、憧れていた弘前が11回目の転勤でやっと実現した。

生まれは青森市であるが、弘前には小学生になるかならないかの頃、父親のバイクに乗せられ公園の夜桜見物と、中学校・高校時代にテニスの試合で何度か訪れたことはあったが、今、振り返ってみるとその都度に弘前の魅力に取りつかれていたように思えてならない。そんないつか住んでみたい想いが、「弘前勤務を命ずる」のたった電話の一声で実現してしまった。20年以上も淡い夢を描いていた弘前が、一瞬のうちに本当になったのである。宇宙遊泳とはどんなものか知らないが、たぶんそんな信じられない気持ちで電話機越しに辞令を受けた記憶をしている。

勤務当初は城東に住まいして、好きなテニスは国体の強化合宿が黒石市であったことから、黒石市営コートまで毎朝5時に起床して通ったものである。東北ミニ国体で惨敗してからは暫くテニスから離れていたが、ラケットを持って歩いている人を見ると無性にコートに立ちたくなるのは、根っこからのテニス馬鹿の証明と苦笑したものである。

平成4年5月自動車で市役所辺りを通るとボールの乾いた音が、追手門の土手越しに小気味よく耳に響いてきたことが鮮明に蘇ってくる。市役所に駐車して、追手門を滞ると生い茂った緑鮮やかな桜とケヤキに囲まれて楽しそうにボールを追う姿は眩しく目に焼きついたものである。ベンチからの掛け声も実に和やかで、心底テニスを楽しんでいたのである。「練習する」のでなく「テニスをする」この言葉も新鮮で心地よかった。以来、仲間として扱っていただいてもう8年になる。その間、十和田に転勤のためブランクはあったが、名前だけは残してくれただけでも有り難いのに、何かある度に連絡をいただき本当に感謝で一杯であった。

文化と歴史の街、新しさと古さが共存する街、四季の似合う街に弘前鷹揚クラブも似合っている。そして30年、たいしたものである。私はそんな鷹揚クラブを誇りに思う。鷹揚の存在は輝く、鷹揚の仲間の今日は素晴らしい。

『流した汗と苦楽が蘇り・』

中西 政人 (平成5年入会)

中学・高校時代は学業そっちのけで庭球に青春をかけて過ごした。来る日も来る日も白球を追いかけて、まっ黒な顔をして目だけギョロギョロさせていた。しかし、さしたる成績を残せぬまま、高3のある事件をきっかけに、2度とラケットを握ることなく、22年間仕事一筋の生活を送ってきた。仕事も順調？、娘も離れつつある時、ふと自分の体力のなさ、運動不足に気づいた。重たい足取り、出っぱった腹、走るとゼイゼイ。何とも情けない姿に「ああ俺ももう40歳なのか」と啞然とした。日頃の不摂生からくる脂肪肝、多量のコレステロールに悩まされながら、精神までもがだんだん汚れていくように思えた。

そんな時、仕事上の付き合いのある野村先生からモーニングテニスのお話を聞き、参加してみることにした。体の動かないのは当然のことであるが、ただ振りまわしたラケットが何とか形になっていて、「まだまだ俺もできるじゃないか。」と思うと同時に、学生時代に流した汗と苦楽が蘇ってきて、言葉には言いあらわせない充実感に浸ることができた。仕事から体力を使うことも少なく、逆にそれを避けてきたのであるが、やはり俺はテニスが好きなんだなと思った時、自然鷹揚クラブに入会していた。何でも思い込んだら一直線。今度は仕事そっちのけで、土・日はコート通い。毎週女房の「今日は何時にお帰り。」の声を背中に受けながら、練習後の反省会はたび重なる午前様。

こんな日々ももう7年目を迎えようとしている。年齢、職業、境遇のそれぞれ異なった方々がテニスを通して、日常生活を楽しく活力あるものにしていく。試合に勝負があるが、そんなことにあまりこだわらない。お互いを認めつつ、心の底から楽しめることが一番大切なことだと思う。若い世代のソフトテニス人口が増えることを期待し、生涯スポーツとして、状況の許すかぎり続けていきたいと思っている。

最後にクラブを発足させ、30年の永きにわたり、これを支えてきた先輩方に敬意を表すとともに、今後末永い活動が続きますよう心からお願いいたします。私自身微力ではありますが、何かしらお手伝いできたらと思っています。

『鷹揚クラブと私』

吉田 悟 (昭和62年入会)

弘前鷹揚クラブとの最初の出会いは、12年前職場の先輩である「花田志郎」さんの紹介でした。その頃の私は土曜、日曜日は暇を持て余しパチンコばかりしていたのです。鷹揚クラブを知ってからはコートへ行くとクラブの人達が気軽に声を掛けてくれるし、いつもプレーをさせてくれるので土曜、日曜日がたのしくてなりません。そしてまた、市民総合体育大会等の試合にもいろいろ参加し何回か賞状を買うことができましたが、未だに心に残っている試合が一つあります。それは市民総合体育大会予選リーグで、当クラブ大先輩の「川越徳二」さん「米谷由美子」さん組に負けたことです。川越さんの術中にはまってしまい、前衛頭越しの中ロブでこんなはずではと思っている間に負けてしまったのです。その1敗は予選ブロック、決勝トーナメントを通してその日唯一の黒星でした。そして、この1敗を期に私とペアを組んでいた前衛「髭の三浦」さんは愛想をつかしてクラブに来なくなってしまったのです。

そんな中、私も結婚し、長女が生まれた頃から足が遠のき、八戸へ転勤になったときは会費も

払わずいなくなってしまったのでした。しかしまたまた弘前に転勤となり、テニスコートへ行ってみると懐かしいメンバーが元気にプレーしているのを見て、厚かましいと思いましたが心の広い弘前鷹揚クラブ皆様のおかげでまた参加させていただいています。

「楽しい交歓・交流試合」

阿保 敏秋（平成3年入会）

緑の樹木に囲まれた弘前公園のテニスコート。その中で早朝、元気に声を掛け合い白球を追い、快い汗をかく。なんともいえないすがすがしさが感じられる。

弘前鷹揚クラブとの出会いは、このモーニングテニス講習会であった。最初ラケットを持って行ったとき、中学生から大人まで約50人以上が集まっていた。初めてラケットを握る初心者、学校などで少し慣れた中級者、そして以前やったことのある経験者と3クラスに分かれていた。しかし、講習会がはじまり、コート別に分かれて実際練習を行うことになったとき、年輩の方が「きょうから来た方は1コートです」というので、そっちに行き順番をに乱打していたら「あなたは玉が早い。慣れているから向こうへ行け」と、ぶっきらぼうに大きな声で言われた。このとき叱られたような気がした。講習会とはこういうものかと思い、それでもテニスをやりたい一心で週2、3回だったと思うが、朝5時に起きて通った。このモーニングテニス講習会は今も続いている。

私がテニスを始めたのは、皇太子殿下が「テニスで結ばれた恋」と当時、話題を呼んでいた時だった。中学校で野球部にいたが、遊びがてらにやっていたテニスを選手の病欠で急遽、中体連に駆り出されたのがきっかけであった。テニス部の顧問が普段から見ているのだろう。そのころまだ市内の中学校にはテニス部が5、6校よりなかった。その後、高校3年間はとにかくテニスに夢中だった。2年生から各地の大会へ出場した。青森の合浦公園に隣接した市営コートと青中央高がほとんどだった。3年生のときの高校総体は八戸が中心会場だった。

社会に出てからは職場の関係でラケットを握る機会がなくなった。それが朝テニスへ1、2度参加したことがあったが、20数年の空白がつづき、少し長く練習するようになったのが7、8年前のモーニングテニスだった。その反省会に誘われ、入会を勧められたのがきっかけであった。しかし、なかなかコートへは行けずじまいである。それでも、最近は月に2、3度ラケットを握るよう心がけ、交流試合を楽しみにしている。なかでも、その一つは大館鶴鳴クラブとの年2回の交歓試合である。ベテランから初心者、年輩組とそれぞれクラスに分かれての熱戦だが、終了後に試合結果を肴に飲むビールのおいしいこと。懇親会の締めくくりに肩を組み、輪をつくって歌うあの顔は、健康美あふれたスポーツマンの顔であり、喜びがいっぱいである。

もう一つ嬉しいことがある。それは普段一般の対外試合へはほとんど出ない私が、1回だけうれしいことがあった。平成7年7月30日、弘前運動公園で行われたシルバーテニス大会で優勝、弘前市長賞を獲得したことだった。参加チームは少なかったが、それでも県内各地から集まっていた。絶好調の倉光正治さんとペアを組んだのだが、幸い、初勝利した。倉光さんはこの試合を契機に、公式戦15連勝という輝かしい戦績を飾った年だったという。

また、札幌遠征旅行も楽しかった。平成8年だった。この年、春に札幌北区同好会の一行が桜の弘前公園で、当クラブと親善試合をたのしんだ。その返礼ではないが、9月に鷹揚クラブのメンバーが札幌に遠征した。ママクラブも一緒だった。函館から札幌へ向かう途中、汽車の中から秋元理事長の奥さんが「私の出身地はあのあたりです。帰りにちょっと寄ってみようと思ってい

る・・・」と言ったのでみんなが「えー、そうー」と車窓へ顔をつけて眺めていた。交歓試合は和気あいあいだった。80過ぎた鈴木正治さんをはじめ17人は、北海道の澄みきった青空の下ではつらつとプレーをした。終わってサッポロビール園で、向かい合って席をとった懇親会でのビールの味は、やっぱり本場だけに格別だった。私は翌日、高校時代の同級生と新千歳駅で20年ぶりに会うことが出来た。とにかく楽しく、有意義な遠征旅行であった。

いずれにしても、我がクラブの仲間は愉快である。この調子で伝達・連絡を密に仲間づくりを大切に練習を重ね、試合出場を多く目指しながら、楽しくプレーできるクラブに一層心がけていきたい。30周年を迎える今回、この節目を大切に会員の和と、外部へ向かって積極的な行動を展開し、クラブのさらなる飛躍へのチャンスとしてとらえていきたいものである。

花吹雪テニスコートに白球追う 子 星

『愛すべき鷹揚クラブ』

酒 井 武 (平成3年入会)

鷹揚クラブが創立された昭和44年、私はまだ小学校2年生であった。その22年後に、産・官の出資で弘前に設立された糖鎖工学研究所に縁あって出向となり、同じ職場の千葉つねさんの紹介で児島薫氏と一緒に入部した。以来、現在に至るまでの8年間、鷹揚クラブの歴史の4分の1位の間所属したことになる。練習への参加率は3割、アフターテニスへの参加率も4割程度なので、あまりクラブのことをわかっているとは言えないが、30周年という良き年に免じて、思うままに書くことを許していただきたい。

まず、最初に鷹揚クラブがすごくテニスの強い人達に似ている話をしたい。鷹揚クラブは基本練習をしないが、京都学生選手権で連続優勝をしていた同志社大学も基本練習はせず毎日試合をしていたらしい。また、数十年前に全日本学生選手権で優勝した山元氏も、我がクラブの人達と同じく「私がテニスをするのは一杯のビールをおいしく飲むためだ。」と断言している。テニスの強い人に似ているということは良いことである。いつしか、プレーも似てくるかもしれない。でもそんなことは万に一つあればいい方だろうな。

そんな一見一流の鷹揚クラブで8年間練習に参加して試合にも出て、とてもテニスを楽しむことができた。クラブに所属しなかったら知らない間に変わっていたであろう、「新ルール」への転換期も経験できた。新ルールの採用により前衛の運動量が増えた。やはり試合にある程度勝つには腕力、持久力も必要になってくる。1年に1回以上はランニングをする決意をするのだが、実行したためしはない。30周年を期に、走ってみようかな。なーんて。

話をクラブのことに戻そう。鷹揚クラブはソフトテニス愛好者の集まりだから様々な目的を持つ人達がいる。試合に勝つため、テニスが上手くなるため、ボールを打つため、人と出会うため、汗をかくため、健康のため、うまいビールを飲むため。様々な人達が一緒にテニスをして酒を飲んで、テニス哲学の話もする。目的が少しずつ違うから話が収束することはまずない。ある意味でとても健全なことである。私の場合、僅か2年程の間ではあったが、ただ勝つことだけを目的に毎日数時間テニスをし、考え、議論をした時期があった。最近では酔いが回った時などはその世界に人をひきずりこもうとしてしまう。テニスをやるにあたって正しい目的は決して一つではない。一人一人の感じていることが皆正しいのである。

何人かの人のテニス観を聞かせてもらったことがあるが、鷹揚クラブでは「勝つ」ということ

はあまり重要な目的ではないかもしれない。しかしながら、部内戦にしろ対外戦にしろ勝った人は皆うれしそうな顔をしている。どんな目的を持つ人も勝てばうれしいのである。また、お互いに勝つために対戦してこそ相手の人間性、気迫などが伝わってきて、初めて味のある試合となる。特に部内戦では、ベアや対戦相手への愛情、自分のテニスを貫こうとする意志の強さ、気の弱さなど、様々なものが表れてきておもしろい。また、おもしろいことは後に、酒の肴にされるので何度も楽しめる。

話をほんの少し変えよう。鷹揚クラブのことをさらに深く知ろうと思えば、鶏鳴クラブのことに触れずにはおけない。我々は「大館戦」と言ってるが、鶏鳴クラブではなんと呼ばれているのだろうか。私は大館戦の8年分しか知らない。しかも、そのうちの半分ぐらいしか参加していないが、大切に守られてきた交流であるということが伝わってくる。あまり試合に勝つことにこだわらない鷹揚の人達も大館戦の時だけは前日からベアのこと等、時間をかけて作戦をたてる。おそらく大館戦では公式戦よりも緊張している人が多いと思う。でも、またこれがいいのである。勝ちたいから本気を出す、本気で対戦するから深いつながりができる。大館戦の宴会では「あれはいい球だったね。」「もっとしっかり続けなきゃー。」「この次は勝つから。」等々楽しそうな会話が飛び交う。また、鶏鳴クラブの会計の人も感じていると思うが、よく2時間くらいの宴会であれほどの酒が飲めるなァー、というくらいの酒がなくなる。しかも多くの人達が2次会へも行く。楽しいときは酒がすすむのである。日頃の倍くらいは飲んでも気持ちよく酔えるものだ。しかし、みんな翌日は大丈夫なのだろうかと心配してしまう。まあでもこれからもこの貴重な交流が続いていくことであろう。

様々な人が集まって30年も軟式庭球、そしてソフトテニスが続けてきた鷹揚クラブ。中学生の試合進行を手伝ったり、モーニングテニス講習会を開いたりささやかな社会貢献もしている。我がクラブながらよいクラブではないだろうか。40周年を迎える頃にはどんなクラブになっているだろうか。若い新人さんも何人か入部しているだろうか。みんな元気でテニスが続けているだろうか。愛すべき鷹揚クラブの輝かしい未来を信じて30周年を祝いたい。

鷹揚クラブ 万歳！！。

『今は亡き母の剛球』

児島 薫（平成3年入会）

入部した最初の年、鷹揚クラブの深い歴史と人の繋がりを感じたことがありました。

鷹揚クラブに入って最初の大館戦、試合後の懇親会の席で大館の御年配の方とお話をする機会があり、50年位前の大館のテニスの事を話してくれました。話が進むうちに、なんと母の名前が出てきました。名前も弘前に転校したことも覚えていました。当時、母は男子と対等に乱打する程の兵だったそうです。母は、既に亡くなって10年になりますが、記憶のなかでは今も元気に剛球を打っていました。鷹揚クラブが歩んできた30年、その歴史の中で、多くの人々との繋がりが生まれ、長い間を越えて母が打った剛球の音を聞くことができました。

私は入部数年の駆け出しですが、鷹揚クラブの歴史を大切に、クラブの一員として新たな歴史を生きたいと思います。

『万咲のカレーうどん』

小山田 伸一 (平成7年入会)

鷹揚クラブ30周年おめでとうございます。私は、鷹揚クラブに4年前に入りました。ソフトテニスは高校時代にやっていたのですが、7年前健康の為にと思い17年振りに始めました。同じ趣味の集まった仲間とこころよい汗をかいたり、酒を飲み交わすのが、とても楽しいかぎりであります。

一つには、大館の対抗試合が、いつも楽しみです。団体戦ということも有り、皆で頑張った時、又負けても互いにはげましあって飲む酒がとてもうまい。テニスをしててよかった。

二つ目には、何とんでもカレー事件であります。平成9年7月6日(日曜日)の昼でした。6~7人でテニスで汗をかいた後、いつもの『万咲』でビールを飲み、その後M氏が、カレーうどんを注文し、カレーうどんが運ばれてきました。おぼんに乗せたカレーうどんがテーブルに半分しか乗っておらず、何とM氏の一番大事な所に、ひっくり反ってしまったのです。「わ!!かかってまった。脱げ、脱げ・・・パンツもぬげ」M氏は短パンを脱いでタオルで股間を隠しました。万咲のおかみさんは「わっはははははははは、大丈夫だが」。となりに座っていたA氏は物事に動じようともせず、「ジャンパーにかかってまったじゃあ、これとれねんだじゃあ!!」とブツブツ。今思い出しても・・・Mさん楽しい思い出をありがとうございました。これからも、鷹揚クラブの益々の発展と楽しいテニスができるよう頑張っていきたいと思ひます。

『鷹揚クラブに感謝』

千葉 つね (千葉 正司氏 妻)

鷹揚クラブ30周年おめでとうございます。

鷹揚のおかげで夫婦共通のスポーツの楽しみを持つことができ、もう23年になりました。私の方はその数年前に始めていましたが、主人のほうはあのいわゆるC級のメンバーがいなかったら続けていけたかどうか・・・。とにかく、テニスコートに行くことが楽しくてみんなに会えることがうれしくてテニスの話ならなんでも聞きたくて、うまくなりたくて・・・、まだ二人とも20代でしたから、テニスの話で白熱しておりました。そんなにのめりこめたのも“テニス”プラス“人の輪の和”があったからだと思っています。いま、健康志向のテニスになった私ですが、コートに立つ時間の長さにかかわらず、テニスがあるというだけで幸せな気持ちになります。長い間ママテニスに所属しておりましたが、ここ数年はほとんど行けずじまい(仕事)でしたので、昨年、親指の不調もあり、休ませてもらいました。今年4月から鷹揚に入れてもらい新たな気持ちで、テニスを楽しんでいきたいと思っております。新潟から帰る主人といっしょにおじゃまできたら最高です。

「鷹揚との出会いの中で」

「ルージュ」のママ

「雨にもマケズ、風にもマケズ」と宮沢賢治の詩がありますが、平成3年の台風19号の時でした。私にとって台風がもたらした爪あとはかつてないほどの被害状況で、ちょうど台風の次の日、鷹揚クラブの予約をいただいたのでした。おそらく試合どころではない筈。来るはずはないと思っていました。しかし、予約を受けた以上やはり責任上、断るにしても断られるにしても店で待つことにしようと思ひ、ドアをオープンにしておいたのです。半ばあきらめかけていた時でした。相馬孝平さんがいアハア息をこらしながら、3階まで上がってこられたようです。開口一番「やあ店を開けてくれたのか。ありがとう、助かった。下で皆が待ってるから呼んでくるね。」と言って階段をかけ降りて仲間を呼びに行く後ろ姿を見ながら、良かった、良かった。開けておいてよかったとしみじみ思ったものでした。このことから私の学んだことは人を迎える心、人との出会い、それがいかに大切なことなのかということです。感動を持ちながら人間の生き方を会得した瞬間でした。

ありがとう鷹揚クラブ、いつまでもルージュを愛して下さい。

鷹揚クラブ役員一覧 (44年～)

会 長

氏 名	期 間
山内次郎	昭和44年～昭和60年
八島忠太郎	昭和61年～昭和63年
篠崎正富	平成元年～平成2年
八島忠太郎	平成3年～平成10年
野村一夫	平成11年～

副会長

氏 名	期 間
里見真平	昭和44年～昭和47年
田村文雄	昭和50年～昭和54年
高瀬栄吉	昭和55年～昭和60年
八島忠太郎	昭和59年～昭和60年
篠崎正富	昭和60年～昭和62年
桜庭作蔵	昭和62年～平成元年
野村一夫	平成元年～平成10年
川越徳二	平成3年～
尾崎健二	平成11年～

理事長 (幹事長)

氏 名	期 間
高瀬栄吉	昭和44年～昭和52年
野村一夫	昭和53年～昭和55年
相沢正敏	昭和56年～昭和56年
坂田喬二	昭和57年～昭和57年
中村善治	昭和58年～昭和61年
野村一夫	昭和62年～昭和63年
今 勉	平成元年～平成2年
相馬孝平	平成3年～平成4年
秋元俊一	平成5年～

顧問

氏 名	期 間
福岡彦衛	昭和44年～昭和47年
斎藤政太郎	昭和44年～昭和46年
黒羽治美	昭和47年～昭和47年
八島忠太郎	平成元年～平成2年
鈴木正治	昭和61年～
八島忠太郎	平成11年～

副理事長

氏 名	期 間
坂田喬二	昭和55年～昭和55年
米谷 実	昭和57年～昭和57年
三上純一	昭和57年～昭和57年
佐藤哲丸	昭和58年～昭和58年
宮下忠男	昭和59年～昭和61年
倉光正春	昭和62年～平成2年
秋元俊一	平成3年～平成4年
中村善治	平成5年～平成10年
今 隆禎	平成5年～
千葉嘉美	平成11年～

会 計

氏 名	期 間
秋元俊一	昭和57年～昭和58年
三浦 進	昭和59年～昭和60年
秋元俊一	昭和61年～平成2年
今 勉	平成3年～平成3年
三浦 進	平成4年～平成4年
酒井 武	平成5年～